

82 明治10年7月24日 菊池長閑宛

第八号七月廿四日 (長閑注記)

去る七日ポストン府出立当ノルス、ウエークフィールド村に着したり此地ハ山勝にて人家甚た稀なり楓松等多して日本の風景と異らず当地辺寒気の強き所にてハ砂糖楓サトウキと名付る楓より砂糖を製する事夥し但し春樹か土地より水を吸揚る時に樹身に穴を穿り揚り行露を管にて桶に取溜め其を煎し詰れハ堅い赤砂糖の如き物に成なり或ハ砂糖にセすに汁にて蓄置砂糖の代りに用ゆ其甘き事極りなし田舎ハ何国も同し事にて隣家ハ皆十丁余も離れ居十四丁四方に漸(ク)六七軒の人家あり去氏皆夏分ハ都府よりの避暑人を寄留さする故凡ソ五十人余も避暑人あり狭い所に居事なれハ直と知合と成互に往来し殊に日本人四人と同宿故田舎に居ても淋しき事なし湖水池沼多して魚釣水泳舟漕等の楽みあり魚ハ鯰鰻山辺の一種なり此内に醬油を取寄セ鰻の蒲焼を作る積り漁の有と無ハ素より当に成らず池にハ池百合と云ふ蓮花の種類あり高地故常に涼風あり殊に月夜にハ散步乗車共甚佳なり此間朝四時に起き内の馬車を借出し日の出を見に出掛たれ共生憎雲掛りにて余り美事ならざりし故趣向を変彼地此地と六七里乗廻り九時頃に歸りて朝飯を食たり当家より寺にハ二里ニリ蒸気車のステーション并郵便所にハ三里あり此にて当地の有様ハ察セ

らるゝなり田舎にてハ寺の事をハ寄合家と云ふなり日曜日ハ  
 説法を聞に往なれ共隣村ハさて置隣家の人にも度々逢れぬ故幸  
 寺にて寄合からの事にもあるへし私も主人夫婦と一返往見た  
 るに男女共篋笥の底の衣服を着込女ハ京都府の婦人と間違れる  
 姿なれ共男の襟飾りを付たる者説教者と外一人ありたるのミ上  
 衣笠共棚にても揚置其日計り用ゆるものと見得誠に帽の縁杯  
 にハ塵ハ一寸も積り居たり説教か済と皆銘々の朋友を尋廻寒暖  
 の挨拶より色々の話をして別れるなり鉄炮持参したる故燕駒鳥  
 雀等時々打留食事ハ牛乳玉子毎日の様に食セ総て品数少けれ共  
 清潔なり主人ハ牛十余頭豚三匹鶏十余頭も蓄置故牛乳玉子杯ハ  
 極て新鮮なり便所ハ豚小屋と薪小屋との間にあり西洋の便所ハ  
 腰掛る都合故日本の如く繩ハ釣せね共拭ふ物ハ蜀黍穀なり木切  
 よりハ柔なれ共孰れか勝るやら知らず当地にてハ蜀黍を作る事  
 夥しく只煮て食のみならず粉にしてパン菓子杯を拵るなり又日  
 本とハ違ひ糞を肥に用えぬ故百姓等迎も一向之を尊ます只豚鶏  
 か食のミ作物ハ蜀黍麦チャガタラ葛等なり去る日主人を助熊手  
 にて刈草を車に積夫より車の上に乗草を踏押杯して楽たり当地  
 に来りし以来水夫の着る如き襟付のシャツを着のミにて上衣な  
 し此形にて何処にも往なり田舎に居人ハ皆籠服をする故更に無  
 礼にても目立もせず跡ハ次便に申上へし皆様に宜しく

御尊父様

武夫

(長閑注記)

(朱書)

「(九月十四日日数五十三日ニテ達シ)

同十五日第八号ヲ以テ返書出し」